海から海へ——初代首相の大構想

カナダ連邦の統一を達成し、今日のカナダの基礎を築いた初代首相ジョン・A・マクドナルド。カナダの歴史の中で、マクドナルドほどまさに〝国父〟の名に値する大事業をなしとげ、また国民から愛された政治家はいない。

マクドナルドの半生は、アメリカ合衆国の膨張政策から、いまだ脆弱なカナダを守り通すことに費された、といってもよい。当時アメリカは、南北戦争をへて国家統合を完成し、北アメリカ大陸全土を支配するという〝明白な運命（マニフェスト・デスティニー）〟論に支えられて、カナダに侵略する気配を見せていた。カナダをアメリカの〝魔の手〟から救い、自立できるための力をつける——これがマクドナルドの政治理念だった。

当時のカナダは、ローワー・カナダ（今日のケベック州）とアッパー・カナダ（同オンタリオ州）という二つの英国植民地が、東部カナダ（ケベック）と西部カナダ（オンタリオ）からなる連合体に移行しようとするところであった。これら二植民地は一八四一年に連合カナダとして統一され、キングストンが首都になった。大西洋沿岸の諸植民地はその連合体には加わらなかった。

こういう状況の中で、マクドナルドは英王党（トーリー）（保守党の前身）から立候補して、議員に当選する。二十九才であった。二年後には、三十一才の若さで税務長官としてジャーウッド・ディリー内閣に入閣する。

ところで、一八四〇年代から五〇年代にかけては、内外とも不安定な状態が続いていた。統合カナダの中では、イギリス系の西部カナダとフランス系の東部カナダがことあるごとに衝突し、首都さえも四年ごとにトロントとケベックの間で交代するありさまであった。外にあっては、英国がそれまで保証していたカナダ産小麦に対する免税と材木に対する低率関税を撤廃し、カナダ（および他の植民地）との特別な経済的きずなを断ち切った。反面、カナダにある英領植民地と合衆国の間では、関税が大幅に撤廃され、経済交流が盛んになってきた。

一方、カナダにとって、合衆国は、英米間で決着していなかったロッキー山脈以西の国境線をめぐって強硬な態度に出るなど、次第に大きな脅威になっていった。

マクドナルドは、こうした状況の変化をみて、いよいよカナダ統一の必要性を確信する。そこで、彼はまず党内のイギリス系とフランス系の間をまとめ、一八五七年にマクドナルド・カルチェ内閣を作った。続いて、一八六四年、マクドナルドは東西カナダ間の争いで暗礁に乗り上げた議会に解散を命じた英国総督の意向を無視し、反カトリック、反フランス系の政敵ジョージ・ブラウンと協議してカナダにあるすべての英国植民地を何らかの形で統一するための連立内閣を発足させる。カナダにとって大きな転機が訪れた。

その後シャーロットタウン（プリンス・エドワード島）とケベック市で開かれた連合カナダ植民地会議で、マクドナルドは精力的に、そして雄弁に米国の脅威と植民地統一の絶対的必要性を説いた。一八六五年三月七日午前四時過ぎ、各植民地の代表（ファーザーズ・オブ・コンフェデレーション）たちは、ついに九十一対三十三で統一の内容を盛った「ケベック決議」を採択する。そして、一八六七年七月一日、英国議会の承認を得たケベック決議は「英領北アメリカ法」として発効、ここにオンタリオ、ケベック、ノバ・スコシア、ニュー・ブランズウィックの四州からなる「自治領カナダ（ドミニオン・オブ・カナダ）」が誕生した。

新生カナダの標語として、「マリ・ウスケ・アド・マリ」（海から海へ）が選ばれた。大平原および太平洋沿岸を含む、大西洋から太平洋に至る全国土の統一と発展への願いが、この標語には込められていた。

初代首相には、もちろん、マクドナルドが選ばれた。

しかしマクドナルドには、就任早々から幾多の困難が待ち構えていた。大西洋沿岸のノバ・スコシア州では、早くも連邦脱退の動きが出ていたし、大平原ではフランス人とインディアンの混血であるメティスが独立した居住地を作り、合衆国に加わろうという気配さえ見せていた。アメリカが狙っていた北西一帯は、まだハドソン湾会社から連邦政府に移管してなかったし、ロッキー山脈によって隔離されたブリティッシュ・コロンビアは、カナダ連邦への加入にちゅうちょしていた。

ノバ・スコシアの脱退問題は、マクドナルドが連邦加入に批判的なジョセフ・ハウを入閣させることによって解